

原 著

高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による看護学生の高齢患者の理解の実態

今井 芳 枝, 板 東 孝 枝, 高 橋 亜 希, 近 藤 和 也

徳島大学大学院医歯薬学研究所

(令和元年10月3日受付) (令和元年10月18日受理)

本研究では、高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による看護学生が捉えた高齢患者の理解を明らかにすることを目的とした。看護学生3年生17名を対象にオレム看護理論を活用しながら高齢患者をどのような存在と捉えたのか等の半構造的面接法を実施した。結果、【高齢者の能力に目を向けて制限された所を補完する】、【人生を生き抜いてきた先人ゆえの強靭さを持つ】の2つのカテゴリーが抽出された。学生は、高齢患者をセルフケアできる人という主体的な存在として捉える視点と長年生き抜いてきた力強さを持つ存在であると理解していたことが示された。学生が高齢者の成熟の要素を意図的に捉えることができるようにセルフケア行為力のアセスメントの強化が必要であることが示された。

高齢者は加齢による身体機能や社会的役割の狭小化などによる衰退の要素と同時に、長い人生を生き抜いてきた中で培った成熟の要素を合わせ持った存在である。このような、高齢者の2面性を理解しつつ、成熟の要素を活かし衰退の要素を補完していくことが高齢者看護には重要となる¹⁾。オレム看護理論²⁾はセルフケア不足理論を基盤においた看護理論であり、セルフケアの視点から不足を確定し、そこを補完できるように看護援助する理論である。特に、セルフケア行為力をアセスメントすることは、高齢者の持つ能力と制限に注目することになる。それは、2面性を持つ高齢者の特性を生かしたケア視点を育成することにつながると考える。

先行研究において、高齢者看護学実習におけるオレム看護理論を基盤とした看護過程の展開に対する学生の学びとして、対象者との相互作用や理解につながる体験となったことが報告³⁾されている。また、オレム看護理論

活用することで援助内容が看護者主体の考え方から対象者主体に着眼点が変わり、対象者の現状理解が容易になった学生が増加したとの報告⁴⁾もある。これらより、対象者をどのような存在と捉え、アプローチするかにオレム看護理論が寄与していると考えられる。しかし、実際に学生が高齢患者をどのように捉えているのか、高齢患者の対象理解につながる重要な視点にもかわらず、学生の認識を明らかにした研究はほとんど見当たらない。

そこで本研究では、高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による看護学生が捉えた高齢患者の理解を明らかにし、高齢者看護学の教育指導の方向性を得ることを目的とした。

I. 高齢者看護学実習の概要

高齢者看護学実習は3年後期に成人看護学実習、母性・小児看護学実習、精神看護学実習と共に順不同なローテーションの中で実施される2単位の実習である。受け持ち患者は手術療法・化学療法・放射線療法などの治療のために急性期病院に入院している65歳以上の身の回りを行える者から動けない介助が必要となる者とし、非常に重症および死期が切迫している者は除外している。実習内容と指導体制は1グループ8~9名の2週間の実習で原則1名の患者を受け持ち、オレム看護理論を基盤とした看護過程を展開している。実習病棟は呼吸器・膠原病内科病棟と泌尿器・耳鼻咽喉科病棟、整形外科病棟の3病棟に分かれて実習を行い、指導教員は2名で学生指導を行っている。オレム看護理論に関する学生の事前学習状況としては、1年次の「看護理論」にてさまざまな看護理論の1つとして、理論の概要を学び、2年次の「高

「高齢者看護学概論」・「高齢者援助論」においてオレム看護論の概念枠組みおよび看護過程の展開方法について事例学習を含めて行っている。

II. 方法

1. 期間・研究対象者

2015年2月～2018年2月の高齢者看護学実習を終えたA看護系大学3年生20名中、同意の得られた17名

2. データ収集・分析方法

1人につき1回1時間以内で個室に準じた場所で、「セルフケアを考えていく上で高齢患者をどのように捉えたと思いますか」、「オレムを活用することで見えてきた高齢患者像はどのようなものですか」「オレム看護理論でケア展開することで高齢患者をどのような存在と捉えましたか」という研究者が作成したインタビューガイドに基づいた半構造的面接法を実施し、研究対象者の同意を得られたらICレコーダーで内容を録音した。分析方法はクリップドルフの内容分析の手法⁵⁾を参考にし、個別分析として①面接の逐語録を繰り返して読み、研究目的に関する内容を研究対象者の表現した言葉のまま抜き出し、前後の文脈を考慮して簡潔な文章で表現した。②①で同様の内容や類似した内容のものを整理してコー

ド化した。③更に類似するコードまとめて、その意味内容を表す名前をつけサブカテゴリー化した。次に全体分析として④個別分析より得られたすべてサブカテゴリーを集めて、更に意味内容が類似したものを集めてカテゴリー化した。分析過程において、質的研究の専門家からスーパーバイズを受け、要素の抽出およびカテゴリーの妥当性について検討を重ね、データの信頼性と妥当性を高めるように努めた。

3. 倫理的配慮

実習終了後に本研究の目的や主旨、自由意思であり、参加の有無は成績に一切関係せず不利益が生じることがないこと、署名後でも参加拒否ができること、結果公表時に個人が特定できないようプライバシーの保護を徹底することを口頭と文書で伝えた。同意書の回収はその場で行わず、同意が得られた場合は、実習記録提出日に別に設けた回収箱に同意書を提出するように依頼した。後日、同意が得られた研究対象者に対して都合のよい日時、時間帯を設定し、面接を行った。本研究は○倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：○）。

III. 結果

表1に示すように、17コード、7サブカテゴリー、2

表1. 高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による看護学生の高齢患者の理解

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
高齢者の能力に目を向けて制限された所を補完する	全体的に介入するのではなく部分的に補完する	全部のセルフケアを助けなくていい
		どこを補完するのかを考える できることと区別する
	高齢者がセルフケアできない背景に着眼する	できてない所の介入を考える
		なんでできないかの理由がわかる できないことを少しずつ潰していく
	高齢者のできるセルフケアを見定める	意外とできるので患者に確認する
		患者のできることを尊重していく できることを見極めることが必要
人生を生き抜いてきた先人ゆえの強靭さを持つ	日常生活に高齢者の能力が見いだされる	日常生活から高齢者のセルフケア能力がみえる 日常生活が良く分かるようになる
	人生を生き抜いてきた中で得た能力を持っている	今まで生き抜いてきた力がある 長年の知恵を備えている
	厳しい状況でも頑張ろうとする強靭さがある	最後まで頑張ろうとする力強さがある よくなるための行動を主体的に行っている
	人生をあるがままに受け止める力がある	できなかったら仕方ないという受け止め
		あるがままに受け止めるすごさ

つのカテゴリーに類型化された。カテゴリーを【】サブカテゴリーを[]で、コードを<>で、研究対象者の語りを「斜字」で表す。

1) 【高齢者の能力に目を向けて制限された所を補完する】

高齢者看護学実習におけるオレム看護理論を活用することで学生は、<意外とできるので患者に確認する>ことで[高齢者のできるセルフケアを見定める]必要性があると捉えていた。その捉え方より、[高齢者がセルフケアできない背景に着眼する]ことに繋がりくできてない所の介入を考える>ことや<なんでできないかの理由がわかる>ことから、<全部のセルフケアを助けなくていい>と高齢患者を支援する上では[全体的に介入するのでなく部分的に補完する]と考えていた。これらのことから、【高齢者の能力に目を向けて制限された所を補完する】カテゴリーは、高齢患者は全介助者ではなく、能力を踏まえて看護ケアを考えなければならないという捉え方を示していた。

清拭とかも最初は看護師さんがしていたからできないのかなと思って手伝ってしまったんだけど、実際できるからやっぱりどんどん自分でやらせてもらってできない範囲だけ「手伝って」とかいう感じ。聞くと、「あ、できるよ」みたいな感じだったので、ちゃんと聞いてもっていかないといけないんだなって。意外と患者さんで自分でできる範囲って広いんだなって。できることもあるので、それを大事にしないといけないなと思いました。(学生A)

2) 【人生を生き抜いてきた先人ゆえの強靭さを持つ】

学生は<日常生活から高齢者のセルフケア能力がみえる>ことに気が付き、[日常生活に高齢者の能力が見いだされる]と考えていた。その中で、<よくなるための行動を主体的に行っている>高齢患者の姿から、治療や状態が[厳しい状況でも頑張ろうとする強靭さがある]高齢者のたくましい生き方を感じ取っていた。また、自分であれば、とてもそのようには受け止められないような厳しい状況でも<あるがままに受け止めるすごさ>を通して[人生をあるがままに受け止める力がある]と捉えていた。その背景には、<長年の知恵を備えている>存在であり、[人生を生き抜いてきた中で得た能力を持っている]高齢患者であると捉えていた。これらのことから、【人生を生き抜いてきた先人ゆえの強靭さを持つ】カテゴリーは、高齢患者は厳しい状況下でも、今までの生活の中で培ってきた能力を糧に柔軟に受け止め、生き

抜いていこうとする力強さを持つ存在であると捉えていた。

高齢者ならではの。生きる力っていうのかな、なんかみんながみんなそうではないと思うんですが、患者さんはやっぱりあんまり避けたりすることなく結構しっかり受け止められていて自分の状態もよく解っていて。自分の人生をどう生きるかじゃないけど、がんになったからって悲観するわけでもなく、逃げるわけでもなくあるがままに受け止めている所を私もすごく感じたから、強いなって高齢者の持つ今までいろんな人生経験を経たから危機を上手く乗り越えられるっていうか力なのかなって思いながらみてた。(学生B)

IV. 考察

1. 高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による学生の高齢患者の理解の意味

高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による看護学生の高齢患者の理解として、【高齢者の能力に目を向けて制限された所を補完する】【人生を生き抜いてきた先人ゆえの強靭さを持つ】の2つのカテゴリーが抽出された。

オレム看護理論²⁾では、個人が生命、健康、および安寧を維持するために自分自身で、開始し、遂行する諸活動の実践であり、各々の環境の中で自分自身をケアする能力を身につけた成熟した人々、及び成熟ししつつある人々の行為であると定義している。本研究でも学生たちは高齢者を【高齢者の能力に目を向けて制限された所を補完する】と理解しており、高齢患者は全介助者ではなく、自分自身のことは自分でセルフケアできる人という主体的な視点で捉えることができていたと考える。学生は[高齢者のできるセルフケアを見定める]ことで高齢者の能力に気付いていた。これは、当初、高齢患者は衰退しており、日常生活を全面的に介助しなければならないと理解をしていたことを示していた。今日、核家族化の進行により高齢者との同居割合が少なく⁶⁾、日常的にも高齢者と接する機会が乏しいことから普段の生活の中で高齢者を理解することが困難になっている⁷⁾。そのため、看護学生が高齢者の加齢に伴う身体機能の低下をマイナスイメージにとらえる傾向があること^{8,9)}も報告されていることから伺える。また、セルフケアの見定めは高齢患者がセルフケアできない背景にも着眼する視点の拡がりをみせていた。高齢者看護では、今までの日常

生活における背景や思考、行動を踏まえて、高齢者を理解して看護介入する必要がある。また、高齢者患者の能力に目を向けて制限を補完することは高齢者の尊厳に繋がるケアにもなる。これより、オレム看護理論を活用しセルフケアの視点から高齢患者を捉えることは、高齢者の特性を生かした患者の尊厳を念頭においた対象理解につながられていることが推察できた。

次に、【人生を生き抜いてきた先人ゆえの強靭さを持つ】では、高齢患者は厳しい治療や身体状態でも、今までの生活の中で培ってきた能力を糧に柔軟に受け止め、生き抜いていこうとする力強さを持つ存在であると捉えていることを示していた。学生がこのように理解した背景には、病状の悪化や治療、その副作用などより非常に厳しい治療生活を送る状況下にいる高齢患者であったことが影響していると考えられる。高齢がん患者は、加齢に伴う身体の変化として肝臓、腎臓などの主要臓器の機能、予備能力が低下より副作用が出現しやすいこと、免疫能の低下より感染しやすいこと、他の慢性疾患を合併していること、治療によりADLが低下しやすいことなどの特徴を有しており、加齢や既往疾患により過酷な治療生活を強いられる¹⁰⁾。先行きも非常に厳しい中においても、長年さまざまな苦難を乗り越えてきた経験から、悲観せず生命に真摯に生きようとする姿に、学生は高齢者のたくましさや垣間見たのではないかと考える。金原¹¹⁾は高齢者看護実習を通して、高齢者と深く関わり、治療してよくなりたい、リハビリを行って自立したいといった高齢者の闘病姿勢から高齢者に対するイメージが変化したことを報告しており、治療を受ける高齢患者を受け持つことで高齢者の力強さに気づいたことを指摘している。病気に罹患し、治療過程にある高齢患者ゆえに、見えてきた成熟の要素であったと考えられる。

2. 看護の示唆

高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による看護学生が捉えた高齢患者の理解の実態から、高齢患者のセルフケアの見定めが重要であることが示唆された。高齢患者のセルフケア行為力を査定することで、能力と制限が明確になり、高齢者をセルフケアできる人という主体的な視点が生まれる。また、セルフケアできない背景にも着目する視点にも広がるため、情報収集後の高齢患者のセルフケア行為力のアセスメントが充実できるように教育的指導を入れる必要性が考えられる。また、高齢患者の治療生活を支援することで、高齢者のもつ長年生き抜いてきた経験からくる力強さを学ぶ機会になるこ

とが示された。このような高齢患者の成熟の要素に視点が意図的に向くことができるように、高齢患者の治療に向き合う姿勢や考え、治療を継続して療養生活を送る行動とその思いなどを、日々の看護ケアを通しながらアセスメントすることを指導する必要性があると考えられる。

V. 研究の限界

限定された学生人数や受け持ち患者の状況の違いを考えると一般化には限界がある。引き続き、対象者数を増やすことで一般化を目指す必要がある。また、看護学生のオレム看護理論についての理解度について不明瞭である点も本研究の限界である。本研究による示唆を高齢者看護学実習の指導場面に取り入れ、高齢者理解を活かして看護ケアを展開できるように教育支援をする必要性がある。

VI. 結論

高齢者看護学実習におけるオレム看護理論の活用による看護学生が捉えた高齢患者の理解は、【高齢者の能力に目を向けて制限された所を補完する】【人生を生き抜いてきた先人ゆえの強靭さを持つ】の2つのカテゴリーが抽出された。オレム看護理論を活用しセルフケアの視点からアセスメントすることで、高齢患者を全介助者ではなく、セルフケアできる人という主体的な視点で捉えることにつながっていた。また、治療過程にある高齢患者を受け持つことを通して、今までの生活の中で培ってきた能力を糧に柔軟に受け止め、生き抜いていこうとする力強さを持つ存在であると理解していることが示された。

文 献

- 1) 大西和子：I. 高齢者の看護過程展開における特徴。老年看護学Ⅱ（奥野茂代 編），第5版，ヌーヴェルヒロカワ，東京，2006，pp. 2
- 2) Dorothea, E. Orem: Nursing Concepts of Practice. Press, 2001；小野寺杜紀（訳）：オレム看護論，医学書院，東京，2007
- 3) 今井芳枝，雄西智恵美，牛越幸子，太田浩子：高齢者看護学実習におけるオレム看護論を基盤とした看護過程展開に対する学生の学びと戸惑い。日本看護

- 学教育学会誌, 19(3) : 37-45, 2010
- 4) 仲沢富恵, 古屋洋子: 看護論を活用した授業の意義 (第一報) - オレム看護論を活用して成人の看護を考える - . 山梨県立看護大学短期大学部, 6(1) : 25-36, 2000
 - 5) K. クリップペンドルフ: メッセージ分析の技法「内容分析」への招待 (三上俊 訳). 1版, 勁草書房, 東京, 2006
 - 6) 厚 労 省 : <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/03/dl/data.pdf#search=%27%E9%AB%98%E9%BD%A2%E8%80%85+%E6%A0%B8%E5%AE%B6%E6%97%8F+%E5%8E%9A%E5%8A%B4%E7%9C%81%27> (2019/09/19検索)
 - 7) 切明美保子, 久保宣子, 小笠原みや子: 高齢者看護実習前後の看護学生の高齢者に対するイメージの变化 (第1報). 八戸学院大学紀要, 56 : 141-149, 2018
 - 8) 岩井恵子: 看護学生の持つ高齢者イメージの分析. 関西医療大学紀要, 4 : 110-121, 2010
 - 9) 笠井恭子, 吉村洋子, 寺島喜代子: 臨地実習における看護学生の高齢者イメージの変化. 福井県立大学論集, 23 : 107-116, 2004
 - 10) 大田雅嗣: 高齢者の疾患一血液・免疫疾患一. 老年学テキスト (飯二二, 鳥羽研二 編), 1版, 南江堂, 東京, 2006, pp. 139-149
 - 11) 金原京子, 小川宣子, 田中真佐恵, 吉井輝子 他: 早期体験型の老年看護学実習における看護学生の学びの様相 実習前後での高齢者イメージ・高齢者観に焦点をあてて. 摂南大学看護学研究, 6(1) : 42-49, 2018

The actual situation on how nursing students understand older patients using Orem's nursing theory in the Geriatric Nursing Training

Yoshie Imai, Takae Bando, Aki Takahashi, and Kazuya Kondo

Tokushima University Graduate School of Biomedical Sciences, Tokushima, Japan

SUMMARY

The purpose of this study was to clarify how the students understand the older patients based on Orem's nursing theory in Geriatric Nursing Training. The participants were 17 nursing students in third grade. The interview was carried out using semi-structured interview with students for how they felt older patients. As a result, two categories were extracted ; [they need limited care for deficient parts] and [they have toughness cultivated through their long life]. The students understood the older patients as having self-caring abilities and thought that limited care should be provided only for deficient parts of patients. Also, they understood older patients as having strength cultivated through their long life. It is necessary for teachers to assess the Self-care agency more severely for students to get hold of mature elements characteristic of older patients.

Key words : older patients, nursing student, Geriatric Nursing Training